

2018年度 韓国社会福祉学会春季学術大会報告

2018年度韓国社会福祉学会への参加の所感

中 篤 洋
高知県立大学

2018年4月20日～21日に新韓大学（大韓民国ソウル市内）で開催された2018年度韓国社会福祉学会に日本代表として参加し、「小地域福祉活動の促進要因——高知県及び島根県のホームヘルプ事業史を事例として」という題目で口頭発表した。事前提出を求められたパワーポイント資料及び全文の翻訳作業などは学会事務局を通じ、スピーディに対応していただき、安心できた。念のために大会前日に現地入りしたため、余裕をもって会場の下見や宿泊先近郊の散策などをすることができた。当日の各自の持ち時間は発表時間20分間、質疑応答10分間の計30分間であった。通訳時間も考慮し、端的に発表することが求められ、パワーポイント資料の要点を説明する形でほぼ時間通りに終えた。

一方、発表後、韓国側のコメンテーターからも詳細な講評及び討議議題をいただいた。現在、少子化問題（合計特殊出生率1.29）に直面する韓国の社会福祉は、日本から遅れること約30年の状態にあり、追いかけるスピードが速まっているという。そうしたなか、①認知症高齢者とのコミュニケーション、②コミュニティケア、③子どもの権利の質の3点が特に注視されている。保育所数の増加や保育時間の延長など、サービスの量的拡大の試みが少子化問題の実質的な解決策につながっていないことが問題となっている。制度政策面が進められても、肝心の母親や家族の出産・育児に対する意識・見方が変わらないと大きな改善は難しいということであり、早急な意識改革や的確なニーズ把握が求められる。

なお、発表終了後の午後は自由時間があったので、地下鉄で移動し、ソウル市内を散策した。地下鉄車内には妊婦優先のためのピンクシートがあり、少子化対策の一端を見た思いがした。市内を見渡すと、綺麗な超高層ビルの林立の一方、社会活動に熱心な人、ホームレス、廃れた家屋なども目にし、熱気とともに少なからぬ格差を感じた。こうした3泊4日の韓国の旅を無事に終え、異国への好奇心と異文化を垣間見る面白さの余韻に浸った。